

佐賀県研究成果情報（平成26年度）

「清見」の隔年交互結実栽培における果実品質と収益性				
[要約] 「清見」は、 <u>隔年交互結実栽培</u> により4月上旬まで樹上完熟することで慣行栽培よりも <u>品質</u> が向上し、さらに、収量が安定することにより <u>収益性</u> が向上する。				
果樹試験場・常緑果樹研究担当			連絡先	0952-73-2275 kajushiken@pref.saga.lg.jp
部会名	果 樹	専 門	栽 培	対 象
				カンキツ

[背景・ねらい]

佐賀県ではカンキツ「清見」が広く栽培されているが、品質の不良や隔年結果が課題となっている。そこで、温州ミカンで導入されている隔年交互結実栽培を利用して4月まで樹上で完熟栽培した「清見」の果実品質と収益性について慣行栽培と比較し、隔年交互結実栽培による完熟栽培の導入効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 隔年交互結実栽培を活用して完熟栽培した「清見」の果実品質は、慣行栽培と比較して糖度は約1.0高く、クエン酸含量は同程度となる（図1）。
2. 隔年交互結実栽培した「清見」の反収は、2年に1度の生産においても慣行栽培2ヵ年の合計収量より多くなる（図2）。
3. 隔年交互結実栽培した「清見」の出荷果実の販売金額は、2年に1度の生産においても慣行栽培2ヵ年の合計販売金額より高くなる（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 隔年交互結実栽培は、佐賀県唐津市のネット栽培園地において4月上旬に収穫した果実にて得られたデータ、慣行栽培は、地区平均で袋掛け栽培園地において3月中下旬に収穫した果実にて得られたデータを用いた。
2. 4月上旬まで樹上で完熟させるためには、袋掛けや樹冠被覆資材等を利用し、防寒、防鳥対策が必要となる。
3. 隔年交互結実栽培では、慣行栽培と比較して果実が小玉になりやすいため、着果量は最終的に葉果比60程度とする。
4. 隔年交互結実栽培の遊休年の管理では、収穫後（4月上中旬）、7月中下旬に剪定を行い、結果母枝となる夏枝の発生を促す必要がある。
5. 生産年の施肥は、慣行栽培の施肥量（目標収量に応じて増減）に準じて行い、遊休年の施肥は、慣行栽培より10～20%程度施肥量を増加させるとともに、3～5 t / 10 a の有機物を施用する。

[具体的データ]

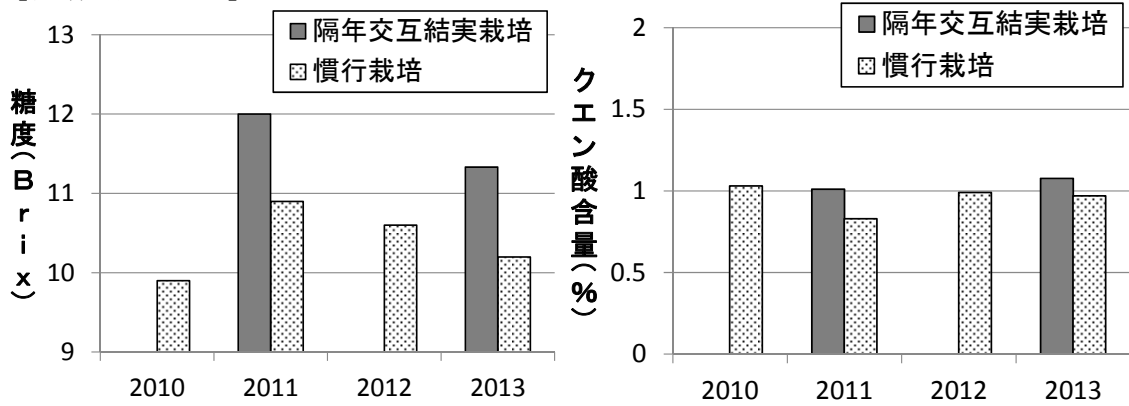


図1 「清見」の隔年交互結実栽培における糖度（左図）、クエン酸含量（右図）

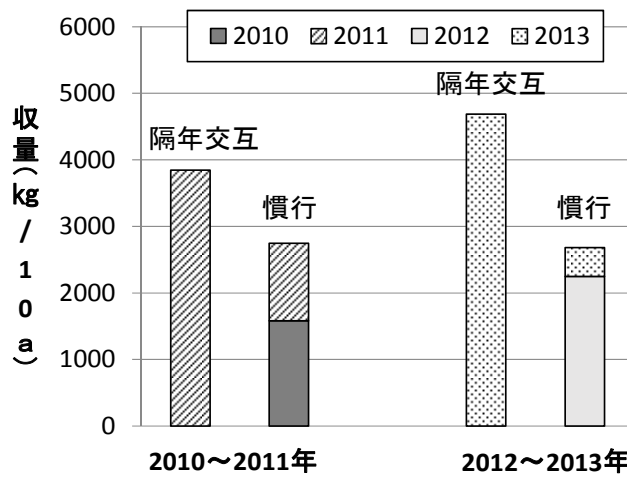


図2 「清見」の隔年交互結実栽培における収量の推移

注) JAの出荷データを利用し10a当たりの収量を算出。

表1 「清見」の隔年交互結実栽培における収益性

生産年	隔年交互結実栽培			慣行栽培		
	販売数量(kg/10a)	販売単価(円)	販売金額(円)	販売数量(kg/10a)	販売単価(円)	販売金額(円)
2010年	-	-	-	1,568	273	427,660
2011年	3,893	241	940,000	1,170	278	325,661
計	3,893	-	940,000	2,739	-	753,321
2012年	-	-	-	2,275	36	81,350
2013年	4,471	210	938,927	418	195	81,393
計	4,471	-	938,927	2,693	-	162,743
合計	8,364	-	1,878,927	5,432	-	916,063

(田島丈寛)

[その他]

研究課題名：温暖化に対応したカンキツの総合的な高品質安定生産技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2009～2014年度

研究担当者：田島丈寛、夏秋道俊、貝原洋平（唐津農林）、新堂高広（佐賀農技防セ）